

はじめに

21世紀COE教育研究拠点形成プログラム「スラブ・ユーラシア学の構築：中域圏の形成と地球化」(拠点リーダー：家田修)の開始にともない、その事業担当者によるいくつかの研究会が発足しました。そのひとつとして「東欧中域圏研究会」も活動をはじめ、一連の研究会を持つことになりました。この研究会では「東欧中域圏」を研究対象地域とし、そこでの様々な問題を取り上げてきましたが、2004年12月8～10日に開催されたスラブ研究センターの冬期シンポジウム「スラブ・ユーラシアと隣接世界の再編」では、この研究会の企画としてシンポジウムのセッションのひとつを組織し、志摩園子氏に「地域空間としての『バルト』の醸成と変容」、菅原淳子氏に「バルカンにおける空間認識」というタイトルで報告をしていただきました。この冊子を構成するふたつの論文は、このときの報告をもとに執筆されたものです。

このプロジェクトでは、スラブ・ユーラシアという空間の中で、その外部世界と接しているいくつかの空間を「中域圏」としてとらえようとしています。その一つとして設定されているのが、「東欧中域圏」ですが、この空間もまたいくつかの地域に区分が可能であるとされています¹。東欧の地域意識を、とくに長い歴史の文脈で取り上げるときには、この下位レベルにある地域に注目し、そのような地域の東として東欧という地域を理解するというのはひとつの方法といえます。地域を「地域意識」という認識のレベルで扱うとき、それはある特定の時代においても多様で、また時代の変化とともにそれは変容するものともいえます。そのような地域のひとつである「バルト」地域をめぐる地域空間の認識を、志摩論文はかなり長い歴史の文脈でたどり、その「醸成」と「変容」を検討しています。また菅原論文はおもに19世紀後半のバルカンでの民族解放運動の中に、今日に繋がる空間認識の形成を見えています。おそらくは、人々の地域に関する「自己認識」と、その外にある人びとの「他者認識」だけでなく、その地域をとりあげて論じる論者の目的とするところも、ここでは問題となるという気がします。ここでは取り上げられなかった「東中欧」ないし「中欧」という地域を含めて、今後もこの研究会の場で議論を継続したいと考えています。

上記のシンポジウムから1年以上が経過してしまいました。この出版の遅れは、ひとえに編者の不手際によるものです。この場を借りてお詫び申し上げます。また、この冊子の編集を担当した伊藤恵理、細野弥恵のお二人にこの場を借りてお礼を申し上げます。

2006年3月
林 忠行

¹ 『スラブ・ユーラシア学』の構築に向けて」〈<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/coe21/program.html>〉